ヲ格非連濁規則を破る力
―後部成素が３拍の複合語を中心に―

鈴　木　　豊*

［キーワード］動詞連用形転成名詞　拍数　結果の持続　アクセント　意味変化

［要旨］動詞連用形転成名詞を後部成素とする複合語のうち、後部成素の拍数が２拍の語（後部２拍語）は非連濁形をとるものが多く、「ヲ格非連濁規則」が機能していると考えられる。後部２拍語には「タイルハリ（タイル貼）」（タイルを貼ること）に対して「タイルバリ（タイル貼）」（「タイルが貼ってある」）の意味をもつ「結果の持続」用法があること、また前者が起伏式、後者（および「ウチバリ（内張）」などの副詞的用法）が平板式のアクセントとなるような使い分けがある点で後部３拍語と異なっている。しかし現代語の後部３拍語に対してもヲ格非連濁規則は全体としては機能しているようである。「コロシ」「ツカイ」「ツクリ」を後部成素にもつ語は古く非連濁形だったが、「人を殺す」「使い方」「入念に作る」という新たな意味が生じた後にそれを古い意味と区別するために連濁形をとるようになった。こうした意味変化によって生じた連濁形は新たに生じる複合語の連濁／非連濁に大きな影響を与える。「メザマシ」が連濁することはそれとは事情が異なり、メサメ＞メザメ・メサマシイ＞メザマシイの変化の後に類推の力が働いて濁音化した。新しい意味の「コロシ」「ツカイ」「ツクリ」はもっぱら連濁形が使用されるため新たに生まれる語はすべて連濁形をとるが、非連濁形がその行為を行う事・物・人（職業）を表すのに対して、連濁形は一般に事のみを表し、物・人の意味をもたない。現代語では「リョウトウヅカイ」「ニセガネヅクリ」のように連濁形が人を表すことは例外的であるが、将来的には増加していくことが予想される。現代語においてヲ格をとる動詞連用形転成名詞のうち後部３拍語ではヲ格非連濁規則の例外をなす語が増加しているものの、３拍語全体としてはヲ格非連濁規則はいまなお機能していると考えられる。

1. はじめに

日本語の連濁／非連濁規則のうち、もっとも基本的なものは連濁は和語に生じるということである。漢語は撥音のあとなどの特別な場合にしか連濁が生じない。外来語に連濁が生じるの

＊教授／日本語学

は古く日本語に入ったポルトガル語などごく一部の語である。語種の区別による連濁の制約は動詞連用形転成名詞（「張る」の連用形から名詞に転成した「張り」など）にも及んでおり、多くの場合他の和語と同様に連濁する（「内張り」「下張り」など）。しかし前部成素と後部成素の関係が「タイルを張る」のようにヲ格である場合は「タイルハリ」のように非連濁形をとる。この場合の意味はタイルを張ることあるいはタイルをはる物（道具）・人（職業）である。前部成素と後部成素がヲ格で結ばれる関係のときにその複合語は非連濁をとるという現象には例外もあるが、多くの動詞連用形転成名詞に共通してみられる現象なのでこれを「ヲ格非連濁規則」と呼ぶことにする。

Benjamin Smith Lyman（1994）で示された非連濁規則の第４則には「チャルメラ吹き」を始めとする数多くの動詞連用形転成名詞が掲げられており、それらは大部分がヲ格非連濁規則に該当するものである。ヲ格非連濁規則に関する研究史の概略は鈴木豊（2009）を参照していただきたい。鈴木豊（2009）はヲ格非連濁規則に関する研究史を踏まえ、「～が～てある」のような「結果の持続」の意味用法の場合は連濁形をとることを確認したが、それは主として後部成素が２拍の語に関する考察であり、後部３拍語については例外の生じる理由について十分に考察することができなかった。そこで小論では後部3拍語にもヲ格非連濁規則が働いているのか、働いているとすれば例外が生じる理由はどこにあるのかについて考察を進める。

2. ヲ格非連濁規則の例外

鈴木豊（2009）ではヲ格非連濁規則の例外となる条件を（1）鼻音と「エ」、（2）拍数、（3）結果の持続用法、（4）意味の分化の四種類に分類して示した。

（1）鼻音と「エ」

後部成素中にナ行・マ行・「エ」の音節を含むという音声的条件下ではヲ格でも連濁形をとる語が多い。その条件に該当するのは「替え」「組み」「越え」「込め」「攻め」「締め」「溜め」「詰め」「止め」であり、例外は「踏み」（「ムギフミ（麦踏）」など）である。

（2）拍数

後部成素が３拍の語は２拍語よりも連濁傾向が強い傾向が見られるが、２拍語にも連濁する語があり、拍数の違いが連濁／非連濁を決定する条件とはいえないようである。２拍語の場合は連濁形に平板式、非連濁形に起伏式アクセントが対応することが多く、連濁とアクセントは並行した現象であるということができるが、３拍語では大部分の語が起伏式アクセントをとる。

（3）結果の持続用法

結果の持続用法をもつ連用名詞は「書き」「賭け」「差し・刺し」「敷き」「締め」「溜め」「付け」「漬け」「積み」「詰め」「張り・貼り」「伏せ」「干し」「冷まし」で、これらは「～ヲ／ガ～シテアルコト」の意味（「結果の持続」を表すアスペクト形式）である。この意味をもつ場合は例外なく連濁形をとる。

(4) 意味による清濁の分化

「エモンカケ（衣紋掛)」と「ゾウキンガケ（雑巾掛)」、「フトンホシ（布団干)」と「コウラボシ（甲羅干)」・「ムシボシ（虫干)」、「ヘビツカイ（蛇遣)」と「ヒトヅカイ（人使)」のように語構造がヲ格で共通していながら連濁／非連濁を異にする例がある。

このうち（2）拍数に関して金田一春彦監修・秋永一枝編（1981)『三省堂アクセント辞典』第二版解説にやや詳しい記述があるので以下に引用する。

アクセント習得法則 13

後部が動詞・形容詞などでできた結合名詞（前・後部とも二拍以下のものを除く）

原則として、前部に関係なく後部によってアクセントが定まる。規則的。

Ⅰ動詞のつくもの

(1) 後部が二拍以下のもの

（イ）前部が後部に修飾的、副詞的にかかるものは、原則として平板型になる。連濁する。

サンニンガケ（三人掛け）

フクロトジ（袋綴じ）

ゴボーヌキ（牛蒡抜き）

ウグイスバリ（鶯張り）　※以下挙例省略

（ロ）後部が前部を目的格とする他動詞（「…で…するもの・こと・ひと」のような意味のある時）は、原則として前部の最後の拍まで高い。連濁しない。

ボーシカケ（帽子掛け）

タマゴトジ（卵綴じ）

クーキヌキ（空気抜き）

ショージハリ（障子張り）　※以下挙例省略

(2) 後部が三拍以上のもの――原則として後部の第一拍まで高い。多く連濁する。

メザマシ（目覚し）

テサグリ（手探り）

オヤオモイ（親思い）

ヤマビラキ（山開き）

ヒトリグラシ（一人暮し）　※以下挙例省略

注　ただし、「居眠り」「気休め」「日帰り」などの四拍語は、語により平板型・尾高型・○○○○型の両用または三様に、「力負け」「心持ち」のような五拍語は平板型・尾高型になる傾向がある。

後部３拍語は「多く連濁する」とのみ記され、連濁例は「メザマシ（目覚)」「ヤマビラキ（山開)」だけがあげられている。しかし現代日本語には「カタタタキ（肩叩)」「ススハライ（煤払)」

「オチボヒロイ（落穂拾）」などの非連濁形も多く存在しており、そのことから３拍語ではヲ格非連濁規則が働かないとはいえないようである。

以下、鈴木豊（2009）で十分に触れることができなかった３拍語の例外を中心として考察をおこなう。

3. 後部成素が２拍の語

まず後部２拍語に見られるヲ格非連濁規則の例外のうち、(4) 意味の分化についての補足説明を行う。

3.1 後部成素の独立性

鈴木豊（2009）では「カリ（狩・猟）」(「シカガリ（鹿狩）」など）を後部成素とする複合語に連濁形が用いられるのは「カリ（刈・苅）」(「クサカリ（草刈）」など）を後部成素とする語との意味の違いを表すためと考えたが、その後考えを改めるにいたった。「ツリ（釣）」と「ツリ（吊）」の対立では前者がヲ格のときは一般的に「サカナツリ（魚釣）」のように非連濁形となる。しかし「オオモノヅリ（大物釣）」「ヌシヅリ（主釣り）」などの語では非連濁形とともに連濁形も用いられる。さらに「マスツリ（鱒釣）」などの語では若い世代では非連濁形「マスヅリ」も使用されるようである。それに対して「ツリ（吊）」を後部成素とする語では「クビツリ（首吊）」などのように非連濁形だけが用いられる。「カリ（狩・猟）」「ツリ（釣）」に連濁形が存在し「カリ（刈・苅）」「ツリ（吊）」に存在しないのは前者が後者に比較して名詞としての独立性が強いことによると考えられる。「狩りをする」「釣りをする」に対して「苅りをする」「吊りをする」は不自然である。よって「シカガリ」「マスヅリ」などの連濁形は通常の名詞＋名詞連濁の結果生じた形ということになる。

3.2 多数形と少数形

「フロシキ（風呂敷）」は本来「風呂に敷く布」、「ナベシキ（鍋敷）」は「鍋に敷くもの」であり連濁形をとるべき語であるが、「石敷き」「板敷き」等の多数の連濁形をとる語が結果の持続用法（「～ヲ敷キ詰メテアルコト」）の意味をもつこと、また接尾辞としての用法（「センジョウジキ（千畳敷）」）も多用されるたことから、意味の区別を容易にするために非連濁形をとったと考えられる。この場合少数形であるがゆえに非連濁形をとったことに注目すべきである。連濁をしていなくとも語としてのまとまりは強く「オオブロシキ」のように後部成素が４拍（一般的には連濁が起こりにくい）であるにもかかわらず連濁形をとる。「カセンシキ／ジキ（河川敷）」がゆれている（辞書の見出しは「カセンシキ」）のはこの語の意味が上に記したような結果の持続用法や広さを表す接尾語としての用法に近いからだろう。「カセンシキ」の後部成素「シキ」は「シキチ（敷地）」の省略形で他に「ナミキシキ（並木敷）」などの語があるが、一般的に省略形であることを理解することが難しいため連濁形が使用されるのだろう。

3.3 新しい意味

太田眞希恵（2011）はNHKが実施した大規模アンケート調査において「ウデグミ／クミ（腕組）」の両形が現れることを指摘している。従来辞書に採録されているのは連濁形「ウデグミ（腕組）」でその意味は「両腕を胸の前に交差させて組むこと」である。これは「キグミ（木組）」「ホネグミ（骨組）」などと同様に結果の持続用法であると考えられる。それに対して非連濁形の「ウデクミ（腕組）」は二人（以上）で腕を組む行為をさし、「腕組みデート」などの複合語の前部成素にもなる。若い女性に非連濁形が多いのは「二人以上で腕を組むこと」という新しい意味の担い手となっているからだろう。

3.4 意味の区別と撥音

通常のヲ格である「エモンカケ（衣紋掛）」「ボウシカケ（帽子掛）」に対して結果の持続用法の「タルタルソースガケ」「レンニュウガケ（練乳掛）」などは連濁形をとる。それに対して「作用を及ぼす」意味の「ゾウキンガケ（雑巾掛）」「アイロンカケ／ガケ」「カンナカケ（鉋掛）」「ハタキカケ（叩掛）」「ソウジキカケ（掃除機掛）」などはどのように解釈すべきだろうか。現代語では「ゾウキンガケ」を除くと非連濁形が一般的（あるいは可能）であるようである。このことから「ゾウキンガケ」は撥音の後という音声的環境のために連濁形をとっていると考えられる。他の語が連濁形をとるのは先行して成立していた連濁形の「ゾウキンガケ」に影響された（類推作用が働いた）ためと考えるべきだろう。「ワックスガケ」は「ゾウキンガケ」との意味の近似性から類推作用が強く働いた結果として連濁形をとっているのだろう。

以上後部２拍語のうちヲ格非連濁規則の例外をとることの説明が難しい語について考察し私案を提示した。

4. 後部成素が３拍の語

表1は 後部３拍語のヲ格連用名詞一覧である。３拍語の連用名詞のうちヲ格の複合語が存在するものだけを選び出し、後部成素の五十音順に配列した。複合語の代表的な例を示した。(1)～(3)の用法は以下に示すとおり。

(1)「～すること」の意味　（例）タイルハリすること

(2) 結果の持続の用法（「～が～てある」の意味）（例）タイルバリの家

(3)「～する物・人」の意味　（例）タイルハリ（職人）　※動植物名を含む

○は非連濁形、●は連濁形、◎は連濁／非連濁の両形が存在する語、×は該当する語がないことを表す。備考欄中の「」内はその他の語例である。

表１　３拍語のヲ格連用名詞一覧

動詞	複合語 ＼ 用法	(1)	(2)	(3)	備　　考
カエシ（返）	蔓返し	○	×	×	蔓を反転する作業
	鼠返し	×	×	●	
カクシ（隠）	目隠し	○	×	×	「釘隠し」「尻隠し」「角隠し」
カタメ（固）	基礎固め	○	×	×	
	床固め	●	×	×	河床を強化すること
カラシ（枯）	藪枯らし	×	×	●	植物名
カサネ（重）	鰻重ね	○	×	×	料理名
	夫（ツマ）重ね	●	×	×	
キライ（嫌）	男嫌い	●	×	●	
ククリ（括）	毬括り	○	×	○	「首括り」
クライ（喰）	大飯喰らい	×	×	◎	
コロシ（殺）	牛殺し	○	×	○	植物名も「鬼殺し」
	人殺し	●	×	●	「親殺し」古くは非連濁
サマシ（冷・覚・醒）	熱冷まし	○	×	○	
	酔い醒まし	●	×	●	古くは非連濁
	興醒まし	●	×	●	古くは非連濁
	目覚まし	●	×	●	古くは非連濁
	眠気覚まし	●	×	●	古くは非連濁
	湯冷まし	×	●	×	
	燗冷まし	×	●	×	
サライ（浚・攫）	ゴミ浚い	○	×	×	「人攫い」
サラシ（晒・曝）	恥曝し	○	×	○	
	布晒し	●	×	×	
スカシ（透）	肩透かし	○	×	×	相撲の決まり手
スクイ（掬）	金魚掬い	○	×	×	
スマシ（清・澄）	水澄まし	×	×	○	昆虫名
ソロエ（揃）	靴揃え	○	×	×	臨時一語
	品揃え	×	●	×	
タオシ（倒）	棒倒し	○	×	×	「ドミノ倒し」
タスケ（助）	人助け	●	×	×	
タタキ（叩）	肩叩き	○	×	×	「蠅叩き」「モグラ叩き」
タヤシ（絶）	蚊絶やし	×	×	●	魚名
ツカイ（使）	魔法使い	×	×	○	「蛇使い」「剣術使い」
	化物使い	×	×	●	
	両刀遣い	●	×	●	

ツカス（尽）	愛想尽かし	●	×	×	
ツカミ（掴）	鍋掴み	○	×	○	「袖掴み」「髷掴み」
ツクリ（作・造）	玉造り	○	×	○	
	人作り	●	×	×	1962 年の流行語
	偽金作り	◎	×	◎	連濁形が自然か
ツツキ（突）	啄木鳥	×	×	○	鳥名
ツツミ（包）	熨斗包み	×	×	○	折紙の名
	香包み	×	×	●	香を包む紙
トオシ（通）	紐通し	×	×	○	「面（メン）通し」
	目通し	◎	×	×	
	夜通し	×	×	×	副詞
トモシ（点・灯）	火点し	○	×	○	
ハサミ（挟）	鬢挟み	×	×	○	
	紙挟み	×	×	●	
ハライ（払）	露払い	○	×	○	「裾払い」「塵払い」「埃払い」
	人払い	●	×	×	「足払い」
	厄払い	◎	×	×	
ハラシ（晴）	憂さ晴らし	●	×	×	「気晴らし」
ヒラキ（開）	店開き	●	×	×	「山開き」
	鉢開き	◎	×	×	鉢の使い始め
ヒロイ（拾）	ゴミ拾い	○	×	○	
	命拾い	●	×	×	「拾う」意味ではない
フカシ（更）	夜更かし	○	×	×	
フラシ（降）	雨降らし	×	×	●	動物名
フルイ（篩）	土篩	×	×	○	「灰篩」
	饂飩篩	×	×	●	「茶篩」
ヘラシ（減）	人減らし	●	×	×	「口減らし」

まず表1全体から読み取れるのは以下の（1）～（3）である。

（1）後部３拍語にヲ格非連濁規則の例外が多いことは事実だが、ヲ格非連濁規則に合致している語もまた多く存在する。「カクシ（隠）」「タタキ（叩）」「サラシ（晒･曝）」「スクイ（掬）」「タオシ（倒）」「ツカイ（使・遣）」「トオシ（通）」「ハライ（払）」「ヒロイ（拾）」にはヲ格非連濁規則に合致する複数の複合語がある。

（2）大部分の複合語が東京語で起伏式アクセントをとる。また、平板式アクセントが必ずしも副詞的用法と結びついているわけではない。

（3）結果の持続的用法を持つ語がほとんど存在しない（表３の中では「ユザマシ（湯冷）」「カンザマシ（燗冷）」「シナゾロエ（品揃）」の３語のみ）。

次に、ヲ格非連濁規則の例外のうち、連濁形をとる複合語の数が多く存在する語について以

下にその理由を個別に検討する。

「カエシ（返）」…「ネズミガエシ」など連濁形をとるのは後部成素に「エ」の音節を含むという音声的環境が連濁形を許容したのだろう。

「コロシ（殺）」…「ヒトゴロシ」は『言海』の語釈に「非理に人を殺す」とあるように「ネズミコロシ（鼠殺）」や「ムシコロシ（虫殺）」など人以外のものを殺す場合と意味の上で区別されているようである。「ヒトゴロシ（人殺）」は職業として人を殺すわけではなく殺人を犯した人をさしており、この点で人以外のものを殺す場合（職業あるいは道具を表す）と異なっている。

「サマシ（冷・覚・醒）」…後述するように古く非連濁形だったが「メザメ（目覚）」などが連濁形をとることになったために後部成素に「サマシ」をもつ語も連濁するようになったと考えられる。

「ツクリ（作・造・創）」…「ニワツクリ（庭作）」「モノツクリ（物作）」などの非連濁形が人を表すのに対して、連濁形は人をあらわさない。「ヒトヅクリ（人作）」は1962年の流行語。これらは「クニヅクリ（国）」などとともに新たな造語であり、その後の人を表さない連濁形（たとえば「カンケイヅクリ（関係作）」など）の使用が増加する起点・原因となった。「ツクリ」は古くは作る事・物・人の意味を表したが、新たに人を表さない「ヒトヅクリ」などの語が生まれてから、作る事には連濁形が用いられることが一般化したようである。「ニセガネツクリ／ヅクリ（贋金作）」はその転換期に当たっていたため両形が存在するか。現在では古く「ツクリ」だった語も連濁形「オケヅクリ」「タルヅクリ」などが作る事・人を表すようになってきている。将来的にはさらにこの傾向が進むと考えられる。

「ツカイ（使・遣）」…連濁形は「ヒトヅカイ（人使）」「ユビヅカイ（指使）」などのように「～の使い方」を表す。人を表す場合は「リョウトウヅカイ（両刀使）」を除いて非連濁形をとる。なお古典落語に「化物つかい」があるが絵本では「ばけものづかい」である。

「ハライ」…非連濁規則に合致するのは動詞の原義を残す「裾払い」「塵払い」「埃払い」であり、規則に反するのは原義からはなれた「人払い」や「足払い」（柔道の技）である。

表2は「サマシ（冷・覚・醒）」を後部成素にもつ複合語の一覧である。『日本国語大辞典 第２版』（以下『日国2』と略称する）の見出し語にある後部成素が「サマシ」の複合語の用例について、その清濁を出典の成立年順に配列して示した。なお「メザメル」「メザメ」「メザマシイ」「メザマシグサ」「メザマシドケイ」についても「メザマシイ」の関連語として同様に用例の清濁を示した。表中の項目A～Kは以下の語を示すA「目覚める」、B「目覚め」、C「目覚ましい」、D「目覚まし」、E「目覚まし草」、F「目覚まし時計」、G「熱冷まし」、H「湯冷まし」、I「酔（え）い醒まし」、J「酔（よ）い醒まし」、K（燗冷まし）。また表中の記号の意味は、○＝非連濁形、●＝連濁形、△＝仮名表記だが清濁不明、□漢字表記である。

表２　「サマシ（冷・覚・醒）」を後部成素にもつ複合語の一覧

用例出典	用例成立年	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K
万葉集　一二・三〇六一	8C 後					□						
平中物語　二四	965 頃			△								
宇津保物語	970 ～ 999 頃				△							
蜻蛉日記　上・天徳二年	974 頃			△								
源氏物語　桐壺	1000 ～ 1014 頃			△								
源氏物語　若菜下	1000 ～ 1014 頃			△								
源氏物語　空蝉	1000 ～ 1014 頃	△										
大鏡　三・師輔	12C 前			△								
徒然草　一五	1331 頃	△										
源平盛衰記二二・衣笠合戦	14C 前				△							
新続古今和歌集 雑下・二〇六一	1439					□						
義経記　一・しゃうもん坊の事	室町中か			△								
藤河の記	1473 頃					□						
蔵玉集	室町					△						
虎明本狂言・悪太郎	室町末～近世初	○										
日葡辞書	1603 ～ 04			○●								
咄本・醒睡笑　八	1628					○						
浮世草子・好色一代男　五・三	1682									○		
浮世草子・好色一代男　五・七	1682				○							
俳諧・奥の細道　武隈の松	1693 ～ 94 頃	□										
俳諧・笈日記　中・岐阜・十八楼の記	1695			○								
浄瑠璃・雪女五枚羽子板上	1708					○						
洒落本・風俗八色談　二	1756											●
和訓栞	1777 ～ 62					○						
俳諧・寛政句帖 - 四年	1792	△										
滑稽本・浮世風呂　前・下	1809 ～ 13				●							
大坂繁花風土記	1814											●
俳諧・西歌仙	1816					●						
俳諧・随斎諧話　坤	1819					●						
雑俳・柳多留 - 一〇八	1829				□							
人情本・花筐　四・二四回	1841										●	
重訂本草綱目啓蒙　一一・隰草	1847					○						
八丈実記　土産	1848 ～ 55					○						
和英語林集成（初版）	1867	○										
和英語林集成（初版）	1867							○				
当世書生気質　〈坪内逍遙〉四	1885 ～ 86		●									
不言不語〈尾崎紅葉〉八	1895				●							
風俗画報 - 一二五号人事門	1896				□							
めさまし草	1896 ～ 1901					○						
おとづれ〈国木田独歩〉上	1897	○										
明治卅三年十月十五日記事〈正岡子規〉	1900								●			
思出の記　〈徳富蘆花〉七・一一	1900 ～ 01						●					

用例出典	用例成立年	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K
東京日日新聞 - 明治三四年一一月一三日	1901			□								
朝寐〈森鴎外〉	1906				□							
有明集〈蒲原有明〉信楽	1908	●										
続俳諧師〈高浜虚子〉五八	1909							●				
金貨〈森鴎外〉	1909								●			
別れた妻に送る手紙〈近松秋江〉	1910				□							
桑の実〈鈴木三重吉〉七	1913				●							
黒い眼と茶色の目〈徳富蘆花〉二・三	1914							○				
星を造る人〈稲垣足穂〉	1922	●										
兄の立場〈川崎長太郎〉四	1926		●									
モダンガアルの研究〈片岡鉄兵〉モダン・ガールの研究	1927		□									
機械〈横光利一〉	1930		□									
途上〈嘉村礒多〉	1932		□									
夜明け前〈島崎藤村〉第二部・上・五・六	1932 ～ 35		●									
禽獣〈川端康成〉	1933						□					
真夏の死〈三島由紀夫〉	1952								●			
妻隠〈古井由吉〉	1970							○				
夢の浮橋〈倉橋由美子〉風花	1970								●			
現代経済を考える〈伊東光晴〉Ⅱ・四・二	1973			●								
冷え物〈小田実〉	1975		●									
朝飯〈中村光夫〉一	1975				□							

表2から「メザメ」「メザマシドケイ」「ユザマシ」「ヨイザマシ」を除く他の語の初出例はいずれも非連濁形となっていることが知られる。形容詞「メザマシイ」は『日葡辞書』で連濁形と非連濁形の両方の記載があるので、表中の関連語の中で最も早く連濁形が生じたのだろう。その後「メザマシイ」の影響を受けて「メザマシ」「メザマシグサ」「メザメ」「メザメル」などが連濁形をとるようになったと考えられる。「ユザマシ」「カンザマシ」は３拍語では数少ない結果の時速用法であるが、おそらく２拍語と同じく後の成立時から連濁形をとっていただろう。「エイザマシ」「ヨイザマシ」は「メザマシ」などへの類推のほか、前部成素に母音連続を含むこともあり連濁形をとることになってと推測される。現代語で「ネツサマシ」だけが非連濁形を保っているのは主として前部成素末音節の「ツ」に母音の無声化が生じていることによると考えられる。将来的には「ザマシ」が接尾語化して連濁形「ネツザマシ」が一般化する可能性が高い。

表3は「コロシ（殺）」と「ツクリ（作・造）」を後部成素とする複合語の連濁である。『日葡辞書』『和英語林集成3』『大言海』の見出し形や『日国2』の用例のうち清濁の表示が行われているものによって以下の表3を作成した。表には複合語の前部成素とその漢字表記を示した。○＝非連濁形、●＝連濁形を示す。

「コロシ（殺）」は近世から近代を通じて前部成素が「ヒト（人）」「シュウ（主）」「オンナ（女）」

「コ（子）」など人間を表す語の場合に連濁形をとる傾向が強まり、1950年以降はすべて連濁形をとるようになった。『大言海』では非連濁形が「ウシコロシ（牛）」「オニコロシ（鬼）」「シュウコロシ（主）」「ネズミコロシ（鼠）」、連濁形が「コゴロシ（子）」「ヒトゴロシ（人）」であるが、現代では前部成素が「オニ（鬼）」の場合をはじめとして人以外のものを殺す場合にも連濁形をとる傾向が強まっているようである。おそらく将来的には「ツクリ（作･造･創）」「サマシ（冷・覚・醒）」のように連濁形が一般化するだろう。

「ツクリ（作）」を後部成素とするヲ格連用名詞は古代から近世にいたるまですべて非連濁形をとっていたと推定される。『大言海』では非連濁形が「ウリツクリ（瓜）」「ニハツクリ（庭）」「タツクリ（田）」「タマツクリ（玉）」「ツミツクリ（罪）」「ハナツクリ（花）」「モノツクリ（物）」、連濁形が「キクヅクリ（菊）」「サケヅクリ（酒）」「スエモノヅクリ（陶物）」「ハシヅクリ（橋）」「マユヅクリ（眉）」となっており、ヲ格でも連濁形をとる語が生じていたことが知られる。その後「ヒトヅクリ（人）」「クニヅクリ（国）」などの連濁形をとる新語が生まれた（1962年）。また農作・農夫の意味だった既存の「モノツクリ（物）」に加えて工業製品などを作る「モノヅクリ」が、作庭・庭師の意味だった「ニワツクリ（庭）」に加えて趣味の庭いじり・ガーデニングの意味の「ニワヅクリ」が新たに生まれた。これらのやや抽象的な意味をもつ複合語はその後一般化し、現代語では「カンケイヅクリ（関係）」のように接尾語化して多用されている。古くからの用法が作ること・作る人／物の両方の意味を表すのに対して新しい用法は作る人／物の意味をもたない点が大きく異なるところである。

表３　「コロシ（殺）」「ツクリ（作・造）」を後部成素にもつ複合語の連濁

年代＼語	コロシ（殺）	ツクリ（作）
～ 1700	○イヌ（犬）○●ヒト（人）○ボウズ（坊主）	●チャ（茶）○ニワ（庭）
1701 ～ 1800	○イヌ（犬）○オヤ（親）○オンナ（女）○キャク（客）○シュ（主）●シュウ（主）○ネズミ（鼠）	○ニワ（庭）○ハナ（花）
1801 ～ 1900	○イヌ（犬）○ウシ（牛）○オトコ（男）●オンナ（女）○コ（子）○シュウ（主）○ニンソク（人足）○ネズミ（鼠）○●ヒト（人）	○ニワ（庭）ハナ（花）
1901 ～ 1950	○ウシ（牛）●コ（子）○シュウ（主）○ネズミ（鼠）●ヒト（人）	●ウタ（歌）●キク（菊）●サケ（酒）●スエモノ（陶物）○チャ（茶）○ニセガネ（贋金）○ニワ（庭）●マユ（眉）●ハシ（橋）○ハナ（花）
1951 ～ 2000	○ウシ（牛）○オニ（鬼）●オンナ（女）○ガン（雁）●コ（子）○ネズミ（鼠）●シュウ（主）●ヒト（人）	●クニ（国）●ヒト（人）○ニワ（庭）○●モノ（物）
2001 ～		○●ニワ（庭）○●モノ（物）

表4は国語辞書における「両刀使」の連濁／非連濁である。「両刀使」欄の○は非連濁形、

●は連濁形、（○）は「両刀つかい」ともとあるものを、×は辞書に記載されていないことを表す。「両刀」欄の○は「りょうとうつかいに同じ」とあるものを、●は「りょうとうづかいに同じ」とあるものを、×は語義に「両刀使いと同じ」という説明のないことを表す。

一般に非連濁形「ツカイ（使・遣）」を後部成素とする語は使うことの意味はなく、使う人の意味となる。連濁形「ヅカイ」の場合は使い方の意味となる。例外的に現代語で「リョウトウヅカイ（両刀使）」が連濁形をとっているのは前部成素末の母音音節「ウ」の影響によるものだろう。また、前部成素の長さが４拍と長いことも連濁形をとらせる要因かもしれない。

表４　国語辞書における「両刀使」の連濁／非連濁

編　者	辞書名	出版社	発行年	両刀使い	両刀	備　考
大槻文彦	言海	※	1884	×	×	※成稿 1889 ～ 91　私版
J.C. ヘボン	和英語林集成 第三版	丸善商社書店	1886	×	×	
山田美妙	日本大辞書	明法堂	1892	×	○	
三田村熊之介	新式辞典	鹿田書店	1895	×	×	
上田万年・ 松井簡治	大日本国語辞典	冨山房	1915	○	○	修訂 大日本古国語辞典 新装版 (1953) による
金澤庄三郎	広辞林	三省堂	1925	●	○	
芳賀矢一・ 藤村作	改修 新式辞典	大蔵書店	1931	○	×	
下中彌三郎	大辞典	平凡社	1936	○	○	
垣内松三	辞鑑	河野書店	1950	○	○	
金田一京助	辞海 初版	三省堂出版	1952	○	○	
金田一春彦監修 秋永一枝編	明解 アクセント辞典	三省堂	1958	○ ●	×	
新村　出	言林 新版	小学館	1961	○	○	
新村　出	広辞苑 第１版	岩波書店	1961	○	○	
白石大二	当用漢字送り仮名 筆順 例解辞典	帝国地方行政学会	1964	●	×	
日本放送協会	日本語 発音 アクセント辞典	日本放送出会	1966	○ ●	×	

三省堂編集所	三省堂 新国語中辞典	三省堂	1967	●	●	
新村　出	広辞苑 第2版	岩波書店	1969	○	○	
三省堂編修所	広辞林 第5版	三省堂	1973	●	●	
時枝誠記・ 吉田精一	角川 国語中辞典	角川書店	1973	○	×	
久松潜一・ 佐藤謙三	角川 国語辞典 蔵書版	角川書店	1976	○	×	
山田俊雄・築島裕・ 小林芳規	改訂 新潮国語辞典	新潮社	1980	○	○	
金田一春彦監修 秋永一枝編	新明解アクセント 辞典 第2版	三省堂	1981	○ ●	×	
小学図書	国語大辞典	小学館	1981	●	●	
新村　出	広辞苑 第3版	岩波書店	1983	● (○)	○	
西尾実・岩淵悦太郎・ 水谷静夫	岩波国語辞典 第4版	岩波書店	1986	●	×	
金田一春彦・ 池田弥三郎	学研国語大辞典 第 2版	学習研究社	1991	●	●	
新村　出	広辞苑 第4版	岩波書店	1991	● (○)	○	
三省堂編修所	辞林21	三省堂	1993	●	×	

「ニセガネツカイ／ヅカイ（贋金使）」は前部成素末の鼻音音節の影響で連濁形が許容されるのだろう。

「リョウトウヅカイ（両刀使）」は連濁形でありながら「両刀を使うこと」「二つの仕事を同時にできること」の意味を持つ。このことから、使い方の上手な人（優れた使い手）の意味の場合（「エクセルヅカイ」「ドリフト（走行）ヅカイ」など）に限り、連濁形「ヅカイ」も許容されるかとも考えるが、これはいまだ時期尚早のようである。現代語では使い方の意味を表す「―ヅカイ」、人を表す「―ツカイ」の棲み分けが確固たるものであるので、現代語において「～を上手にする人」の意味で「―ヅカイ」の用法は未だ生じていないと考えられる。しかし「―ヅクリ」に見るように一度連濁形が生じるとそれまでヲ格非連濁規則が機能していたにもかかわらず新たに生じる語は連濁形が適用されるようになる。このように和語では現代語においてもなお連濁形をとらせる圧力が強いと見るべきである。

5. 意味変化と連濁

表5はヲ格非連濁規則の例外に関するまとめである。第2章～第4章で検討してきたヲ格非連濁規則の例外のうち、主として語の意味が連濁／非連濁に関わっている語について後部成素の五十音順に配列した。

表 5 ヲ格非連濁規則の例外に関するまとめ

語＼用法	意　味	ヲ　格 （スルコト）	結果の持続	モノ・ヒト （道具・職業）	備　考
ハリ （張・貼）	①貼ること	タイルハリ	タイルバリ	タイルハリ	
	②接尾	×	×	×	団十郎バリの顔
シキ （敷）	①敷くこと	フトンシキ	イシジキ	＊～シキ	
	②敷地の略	×	×	×	カセンシキ／ジキ
クミ （組）	①一人で	ウデグミ	ウデグミ	×	
	②二人以上で	ウデクミ	×	×	ウデクミデート など
カケ （掛）	①掛ける	～カケ	×	コシカケ エモンカケ	
	②作用を及ぼす	ゾーキンガケ アイロンカケ / ガケ	×	～カケ	ワックスガケ ハタキ・ソウジキ
	③覆う	～カケ	～ソースガケ	～カケ	
コロシ （殺）	①殺す	ウシコロシ オニコロシ	×	～コロシ	オニゴロシも
	②人を殺す	ヒトゴロシ オヤゴロシ	×	～ゴロシ	
ツクリ （作・造）	①作る	ハナツクリ ニワツクリ モノツクリ	× × ×	ハナツクリ ニワツクリ モノツクリ	花匠 庭師 農民
	②念入りに作る	ニワヅクリ ヒトヅクリ 関係ヅクリ	× × ×	× × ×	
サマシ（冷・覚・醒）	さます	メザマシ	ユザマシ カンザマシ	ネツサマシ メザマシ	
ツカイ （使）	①使う	× × 両刀ヅカイ	× × ×	ヘビツカイ マホウツカイ 両刀ヅカイ	古くは清音
	②使い方	ヒトヅカイ	×	×	
動植物名		× × × ×	× × × ×	カダヤシ ヤブガラシ アメフラシ ミズスマシ	
その他		ヒトダスケ ヤマビラキ アシバライ	× × ×	× × ×	

表5からヲ格非連濁規則の例外となっている語は意味の変化が大きく関わっていることが知られる。例外形（連濁形）の多くが原義から派生した新しい意味が結びついている。新しい意味は原義を強調した特別な意味である。原義は非連濁形、派生した意味は連濁形をとり、新旧二つの意味の語は相互に二重形をなしているともいえる。これは「カケ（欠）」と「ガケ（崖）」、「フレル（振）」と「ブレル（振）」など出自形である語頭清音語とそこから新たに生じた語頭濁音語との関係において顕著に見られる関係である。両者は二重語をなしており、清音形に生じた新しい意味（強調形　語頭の場合は指悪的意味も）に濁音形が割り振られるのが一般的である。語頭濁音語の研究史については鈴木豊（2010）を参照していただきたい。

ヲ格非連濁規則の例外を歴史的に見ると『日葡辞書』『和英語林集成』では現在連濁形をとっている語も多く非連濁形をとっているものがあることが知られる。しかし新たな意味の派生などによりひとたび連濁形が生じると、その後新たに生まれる語はそれに倣う（類推の力が働く）。それはヲ格非連濁規則が働かないということでもある。現代語では連濁は語彙レベルで個々に決定されてしまうことになったのである。古くヲ格非連濁規則に従い非連濁形をとっていた「ヅクリ（作・造）」は最近の数十年で連濁形をとることが定着した（そのきっかけは「国作り」「人作り」「物作り」などの新語である）。また古くは複合語の前部成素には「ツクル」の目的語に相当する具体的な語（ニワ・ハナ・モノなど）のみをとっていたが、現代語では抽象的な語（関係・信頼など）も自由に前部成素にくることが許されるようになった。「ツカイ（使い・遣）」も将来的には連濁形が広がる可能性があるだろう。

「オユサマシ（湯冷）」「クツソロエ（靴揃）」「ソデツカミ（袖掴）」「ハコカサネ（箱重）」など国語辞書に登録されるに至らないような臨時に用いられる語においては、現代語でもヲ格非連濁規則が強く働くようである。これらの語ではアクセントも起伏式となる。これは「熟合度」の低い耳慣れない複合語であるためと説明されることになろうが、これがヲ格非連濁規則の本質だろう。ヲ格で結ばれた前部成素と後部成素は本来緩く結びついていたのである。連濁するのはその結び的が強化されて特別な意味をもったためということになる。結局、ヲ格非連濁規則が適用されるのは「～を～する」という動作性の意味を残した語であり、ヲ格非連濁規則の例外となる（つまり連濁形をとる）のは動作性を失って状態性の意味を獲得した語であると抽象することができるだろう。

6. おわりに

動詞連用形転成名詞のうち前部成素と後部成素の関係がヲ格で結ばれている語のうち、後部成素が３拍の語について検討した結果、以下のことが明らかになった。

(1) 後部３拍語はヲ格と副詞的意味でアクセント型の区別がないこと、結果の持続用法がほとんと見られないことの二点において後部２拍語と異なっているが、全体としてはヲ格非連濁規則は３拍語においても機能している。

(2) 歴史的に見た場合、後部３拍語のヲ格非連濁規則は２拍語以上に例外が多く生じている。例外は後部２拍語にも見られる。このことからヲ格非連濁規則は弱体化してきており、この傾向は将来的にも続きそうである。

(3) ヲ格非連濁規則は音声、文法、意味の力によって破られることがある。現代語において規則は強固なものではなくなっている。

(4) ただし、連用名詞の意味が動詞としての原義を残しており、かつその意味が動作性を持っている場合は非連濁形をとる。「カタタタキ（肩叩）」「ホコリハライ（埃払）」「オチボヒロイ（落穂拾）」など。さらに臨時にされる（熟合度が低い）場合は「クツカクシ（靴隠）」「クツソロエ（靴揃）」「ソデツカミ（袖掴）」などのように非連濁形をとる。

(5) 一方ひとたび「ヒトゴロシ（人殺）」「ヒトヅクリ（人作）」「メザマシ（目覚）」などの連濁形が生じるとその後新たに生まれる語も連濁形をとるようになり、ヲ格非連濁規則は機能しなくなる。多数形への類推作用のほうが強く働くのである。

文　献

Benjamin Smith Lyman（1994）“The Change from Surd to Sonannt in Japanese Compounds”　*Oriental studies; a selection of the papers read before the Oriental club in Philadelphia 1888-1894* Oriental Club of Philadelphia pp.160-176

太田眞希恵（2011）「女は男よりも罪作(つみつく)り～ことばのゆれ調査（平成 23 年 1 月）から②～」『放送研究と調査』NOVEMBER 2011

金田一春彦監修・秋永一枝編（1981）『新明解日本語アクセント辞典』第二版　三省堂

小泉保・船城道雄・本田畠治・仁田義雄・塚本秀樹編（1989）『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店

鈴木豊（2009）「動詞連用形転成名詞を後部成素とする複合語の連濁」『文京学院大学外国語学部文京学院短期大学紀要』第 8 号

鈴木豊（2010）「語頭濁音語「バ（場）」の成立過程について」『文京学院大学外国語学部文京学院短期大学紀要』第 9 号

（2014.12.9受稿，2015.1.26受理）